A Study of *Harry Potter*:
A Modern Reception of the Magical World

私は、イギリスの現代小説『ハリー・ポッター』を題材に卒業論文を書きました。一ファンとして、「この小説が私の心をこんなにもつかむのはなぜだろうか」と思い、読者の観点から『ハリー・ポッター』を分析したいと考えたのが、きっかけでした。論文は序論、二つの章、及び結論で構成されており、第一章では『ハリー・ポッター』の一般的な評価、第二章では「語り」の部分の分析から、その評価に結びついた魅力を考察しました。

【第一章　人気と批判】

この章では、『ハリー・ポッター』に対する肯定的、また否定的な評価の両面を取り上げました。このシリーズは、「名前を聞いたことのない人は、イギリスにはほとんどいない」といわれています。第一巻『ハリー・ポッターと賢者の石』が出版された 1997 年から、第六巻『ハリー・ポッターと謎のプリンス』の 2005 年までに、このシリーズは数々の賞を受賞してきました。それは、児童文学という枠を超えて評価されることもしばしばでした。
英国の権威ある文学賞の一つであるウィットブレッド賞の選定委員が、2000 年に、今まで除外していた児童文学の部門を新たに作ろうと規則を改定した、という事実は明らかに『ハリー・ポッター』を意識してのことです。

このような人気ぶりは英語圏に限られた事ではなく、このシリーズは世界の 60 ヶ国語に翻訳され愛されています。そして、これによって作家 J.K.ローリングは、イギリスで作家として始めての億万長者になりました。

しかし、「人気」というものは必ずしも、その「質」を保証するものではありません。作家の想像力に高い評価を置いている人がいる一方で、イギリスの伝統的な作品からアイデアを盗んだだけだと考える人もいます。ル・グウィン『ゲド戦記』や C.S.ルイス『ナルニア国物語』と比較すると、ローリングはドラゴンといった伝統的なものをただの「アイテム」として用いており、それは浅はかな本である証拠だと考えているのです。そして、重要な点として、このような意見は決して少なくないということです。

では、なぜこのシリーズはこんなにも爆発的に売れているのでしょうか。それは、否定的な意見を持つ全ての人が抱く疑問です。私は、第二章で、その理由を考えました。

【第二章　語り】

この章では、語りの部分を分析し、このシリーズの魅力を考察しました。『ハリー・ポッター』は、内容的に議論されることが多く、ときに語りの稚拙さは批判されていますが、深く分析されたことのすくない部分です。私は、その部分にこそ、最大の魅力が隠されていると考えました。

A. Free Indirect Thought

まずは語りの一般的な分析からはじめました。作家は、登場人物の考えを語りの部分で表現させる必要があるとき、登場人物の立場に応じて、いくつかのスタイルから選びますが、その種類は下記の５つに分けられます。

[1] Does she still love me? (Free Direct Thought)
[2] He wondered, ‘Does she still love me?’ (Direct Thought)
[3] Did she still love him? (Free Indirect Thought)
[4] He wondered if she still loved him. (Indirect Thought)
[5] He wondered about her love for him. (Narrative Report of a Thought Act)

FDT は思ったことをそのまま述べたもの、DT はそれに伝達部をつけ、コンマなどを用いて被伝達部を別にしています。IT は、それを一文にすることで時制の一致や人称の変化がおきており、

FDT では IT の被伝達部だけを取り上げ、時制の一致や人称の変化はそのままに、クエスチョンマークなどの記号だけをつけています。NRTA は、思考の要点だけを述べています。そして、通常、思考というものは一人でなされるものであり、外部から認識できないものです。仲介者の存在し間接的に伝える IT が最も自然な表現方法と言えます。その結果、基準は IT となり、以下の図ができます。

NRTA　　IT　　FIT　　DT　　FDT

↑
基準

それぞれのスタイルの持つ登場人物の観点は、作者の干渉の度合いに大きく関連しています。基準から右への動きは、干渉が少なく登場人物の自由が生まれます。反対に、左へ動くと、作家の干渉が前面に出され、登場人物の思考は、作家の解釈を通して読者に伝えられます。つまり、登場人物の思考の表現方法を変えることで、読み手と登場人物の仲介役である作家のポジションが変わります。

B.　シリーズ中に見られる Free Indirect Thought の多用

『ハリー・ポッター』では FIT がより多く用いられています。分析の結果、第一巻『ハリー・ポッターと賢者の石』では、53 箇所で FIT が使用され、驚くべきことにその 42 回は主人公ハリーの思考を表現しています。ハリーの思考を表す FIT は、彼のシリーズ最初のセリフからわずか 5 行下で FIT が用いられ、その後も最終章に至るまで用いられています。また、FIT は、その特徴のため、容易に見過ごしてしまいがちなものもあり、そのため興味深い効果が生まれることがあります。第一巻、キングズクロス駅で、9 と 3/4 番線が見つからなくて途方に暮れたシーンでの一文をみてみます。

> “Hagrid must have forgotten to tell him something you had to do, like tapping the third brick on the left to get into Diagon Alley” .

ここでは話し手の査定を表す「認識的」法助動詞が用いられています。この‘must’は‘論理的必然性’（=推量）の意味であり、上の一文は、ハグリッドがハリーに伝え忘れたという事実を指しているのではなく、ハグリッドがハリーに伝え忘れたに違いないというハリーの考えを示していると考えられ、この一文は FIT であることが分かります。このように、様々な場面においてローリングの仲介なしでハリーの思考に触れることを可能にしています。これはハリーにだけ用いられるので、読者はハリーに特別に感情移入しやすくなります。

この感情移入はミスリードを生じさせます。第一巻では、誰かが賢者の石を盗もうとします。ハリーはその犯人をいつも敵対しているスネイプだと考え、ストーリーは進んでいき、本文中では、幾度もハリーのスネイプに対する疑いを FIT で表しています。友達のハーマイオニーは、ハリーの推測が間違っている可能性を直接話法で指摘します。しかし、その後もハリーは FIT で疑いを強めていき、最終章で、犯人はクィレルであることが分かったとき、衝撃を受けます。作者はハリーによるミスリードを許し、そのためにあえて全知の語り手というポジションを捨てています。その結果、読者はハリーとともにミスリードしていくため、最後に真実を知ったときにもハリーと同じように、驚き、ショックを受けます。

＜まとめ＞

このように、作者は語りの部分にハリーの思考を表現する FIT を多く挿入し、また自分自身は全知の語り手というポジションを捨てることで、語りの視点をハリーに焦点化しています。その結果、読者はハリーに容易に感情移入でき、自分とハリーを同一化することになります。この同一化こそ、このシリーズの魅力のひとつといえます。